

国語科授業実践力の育成---模擬授業の成果

国語教育講座・氏名 三浦和尚

1. 授業の概要

小学校における国語科学習は、他のすべての教科に比べて学習時間が多い。それは、小学校におけることばの学習があらゆる学習の基盤となるという点と、習得に時間がかかるという点を理由とするものである。特にことばは、世界の認識そのものであり、思考のための唯一のツールである。言語の教育としての国語科は、あらゆる認識・思考活動の基盤を形成し、学校における学びのための前提となる。

本授業では、中学校との関連を含む言語の発達論を根底に、学習者を言語生活者として位置付け、言語生活の学習指導のあり方を、小学校国語科教育の目標・内容・方法という視点から考察することにより、小学校国語科教育の目標・内容・方法について理解を深めると共に、その実践力の基礎を養おうとした。

実践力の育成という観点から、具体的な教材を対象に、実践と研究という両面からアプローチして、授業構想力、授業評価力などについて身につけさせようとしている。その内容は、次のような課題として学生に提示している。

1. 国語を教えることには、どのような意義があるのでしょうか。
2. なぜ国語は、他の教科よりも、特に低学年において時間数が多いのでしょうか。
3. 「国語教育」と「国語科教育」はどのように違うのでしょうか。
4. 国語科教育の目標はどのようなものなのでしょうか。
5. 国語科教育は、どのような内容を扱うのでしょうか。
6. 国語の教材研究は、どのようにしたらよいのでしょうか。
7. 学習者を中心にした授業とは、どのようなものなのでしょうか。
8. 国語科の学習指導計画は、どのように立てればよいのでしょうか。
9. 国語科の学習指導案作りで気をつけるべきことは何ですか。
10. 学習指導の評価は、どうあるべきものなのでしょうか。
11. 「読むこと」の学習指導は、どのような文種を扱いますか。
12. 「読むこと」の学習指導で気をつけることは何ですか。
13. 国語の読解・解釈に、正解はあるのでしょうか。
14. 「書くこと」の学習指導はどのように展開すればよいのでしょうか。
15. いわゆる「赤ペン」を入れるときに気をつけることはどんなことですか。
16. 「話すこと・聞くこと」の学習指導はどのように展開すればよいのでしょうか。
17. 「話すこと・聞くこと」の評価はどのようにすればよいのでしょうか。
18. 「言語事項」として学ぶべきことには、どのようなことがありますか。
19. 「文字指導」は、どのように行えばよいのでしょうか。
20. 「書写指導」は、どのように行えばよいのでしょうか。(ちなみに私は字が下手です)
21. 読書指導はどのように行えばよいのでしょうか。
22. 1年生はじめの「入門期」は、どのように指導すればよいのでしょうか。
23. 「国語単元学習」というのは、どのようなものですか。
24. 他の教科、特に生活科や総合的な学習と、どのように関連させるのですか。さて、究極の問題です。
25. 「楽しくて、よく分かる」授業を創るには、どのようにしたらよいのでしょうか。

しかし、実践力の育成を掲げながら、これまでこの授業では「指導案作成」とその評価については行ってきたものの、「模擬授業」は取り入れて

こなかった。今年度はこれを改め、一回であるが「模擬授業」を取り入れてみた。

実際に模擬授業を行うことで、小学校の特に低学年への対応がイメージ化されるのではないかと思われたからである。

特に、発達という視点を明確にするために、小学校一年生の物語教材「夕日のしずく」を取り上げ、指導案を書かせた後、学生による模擬授業、協議を行った。さらに、作品の解釈と取り上げるべきポイント、発問の可能性などを講義として取り上げた。

2. 授業評価の方法

面談法と感想記述を中心としたアンケート法によった。

全受講者数は116名である。

3. 結果の概略と感想

以下に複数の学生の感想を提示して、授業を振り返る。

A この授業では、「国語」という教科がどうしても必要なのかということを始めとして、指導案の書き方や授業における発問の仕方、文章においてどこに注目するかなどについても学ぶことができた。特に「夕日のしずく」という教材から、自分なりの指導案を作成し、授業計画を立てたことは、とてもいい経験になり、たくさんの学びがあった。教師の授業展開の仕方ひとつで、子どもの興味や思考の内容が大きく変わってしまい、何を目的としているのかということを確認しておくことの重要性についてもよくわかった。小学校国語の指導方法について、細やかなところまで理解することができたと思う。

教科書として用いたあの本は、本当にためになることが多く書いてあるので、もっとしっかり読みこんでいこうと思う。

B 国語科学習の意義にはじまり、国語科教育の目標、内容、評価、教材研究の視点、読むことの学習指導についてなど、三浦先生の経験的知見を交えながらの授業は、わかりやすかった。

特に、「夕日のしずく」の指導案作成は、とても実になる活動だった。対象が一年生ということもあり、難しすぎないように配慮するのが大変であった。友達の指導案には、絵を描く活動や、音読発表会をするという、自分にはない考えがたくさん詰まっていた。同じ教材でも、人によって解釈の違いがあり、それにより指導過程も異なっているので、多様なアイデアや考えを学ぶことがで

きた。

C この授業で一番印象に残っているのは、指導案の作成・模擬授業である。国語の指導案は初めて作成した。この教材で何を教えたいのか、どういった展開にしていくかを考えるのは大変難しかった。また、一年生の理解力、集中力、授業が一時間でどれくらいの内容が進められるのかについてイメージしにくかった。先生の学習させたいポイントについて説明を受けたとき、こんなにも教えるべき点があったのかと、自分の力不足を感じた。教材を読みこむ時間も十分ではなかった。学習指導要領についても、各学年でどの程度の学習をする必要があるのかについて知っておかなければならないと思った。模擬授業では、授業のポイントを多く学ぶことができた。[中略]他の人の指導案を見て見ると、自分には思いつかない工夫がいくつもあり参考になった。特に、手紙を書く、絵を描くというのは、そこからイメージが広がり、想像することを楽しめるのではないかと思った。

指導案作りや模擬授業を評価している学生ばかりではないが、全体としてはそのことによって目を開かれたことが多いことが記され、好評であった。やはり、具体のところを考えないとなかなかイメージはわからないようである。

そういう意味では、六年生ではなく一年生の学習という、記憶から遠いところに教材を設定したことは、効果的であったと思われる。

教材のポイントを詳しく提示したのも意味があったようである。まだ基本的に学生は教材を教材として読めてはいない。

また、指導案について、近くのもの同士で読みあって、二人以上の人からの書き込み(評価)をもらうよう指示したのだが、結果として、何人かの指導案を読むことで触発されたことがよくわかり、これも効果的であった。図らずも「相互評価」の効果が典型的な形で現れたと言える。

4. 今後の課題

今回は、実践力の育成という形で、最も直接的な指導案の作成と模擬授業という方向で指導改善を試みたが、実際のところは、理論的な部分をもう少し時間をかけてやりたいという思いは多くはない。5年後、10年後に実践の中で気づいていくような知見を与えることをおろそかにすれば、必ずその教員の成長は頭打ちになる。単なる小手先の技術を持って「実践力」を語ることは言に慎みたいと思う。